

支那歷代小史

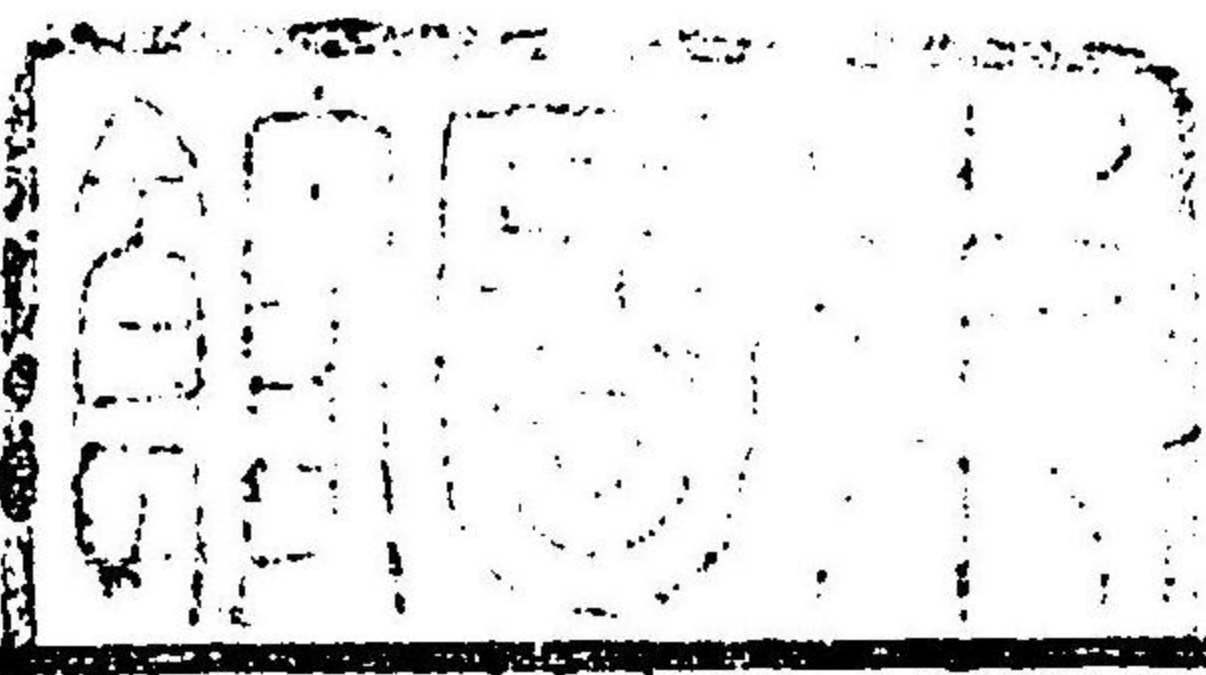
三

次	目	三	第
		曹	秦
			戰國之內

特32
 28
 4
 15
 261

館籍書會育教本日大
 室 第
 一 四
 二 五
 號 函
 冊 架

東
 新書目



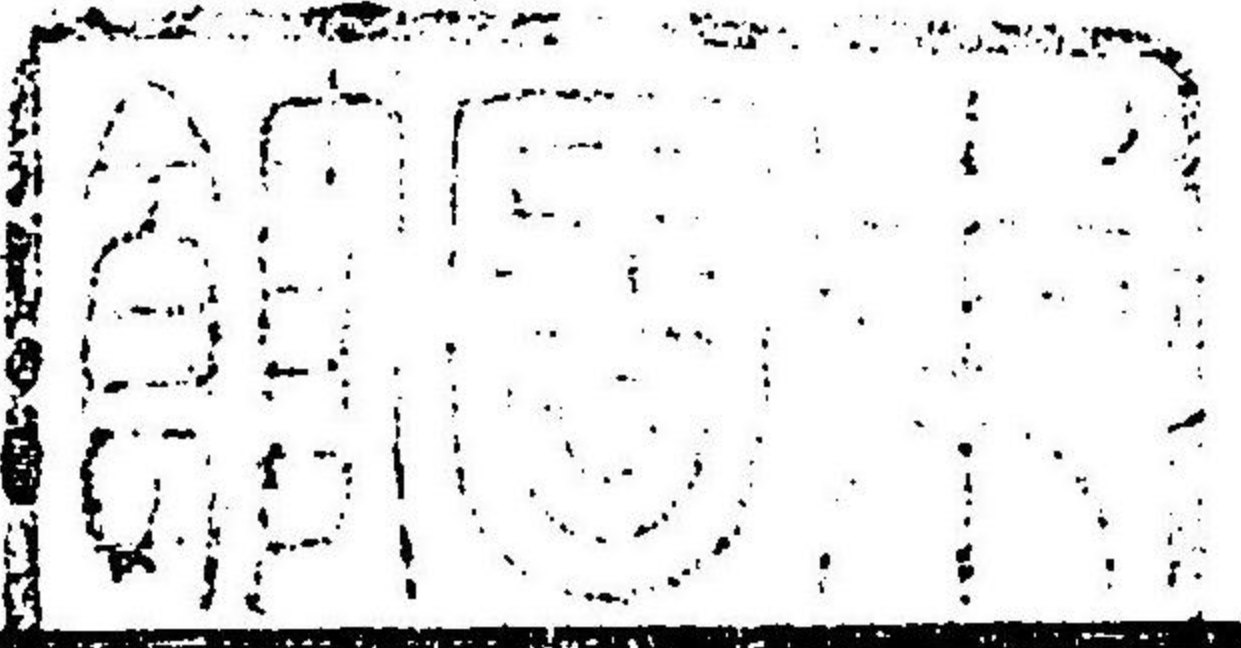
維支那歷代小史卷之三

吉備 山名太喜彌 著述

春秋戰國上
 周の平王東遷の時より以後を春秋の世と云ふ其列國
 の内周と同姓あるもの魯衛晉鄭曹蔡燕吳の八國
 あり周其姓を異よせるもの齊宋陳楚の四國あり其
 國總て十二大國之れを春秋十二列國と云ふ十二列國
 の外尚數の小國ありて共み此の際の間小洋沈せるも
 のゆれども之れ所謂割據群雄の徒みして事頗ぶる繁
 雜み亘り今遂一陳ぶらば然れども列國の事跡を
 記するお當り自ら其興敗を知くを得べし又春秋の
 世を過て周の威烈王の時ふも諸侯互ひ小兵を

維支那歷代小史

山名太喜彌



雜支那歷代小史卷之三

吉備 山名太喜彌 著述

春秋戰國上

周の平

東遷の時より以後を春秋の世と云ふ其列國

の内

周と同姓あるもの魯衛晉鄭曹蔡燕吳の八國

あり

其姓を異よせるもの齊宋陳楚の四國あり其

國總て

十二大國之れを春秋十二列國と云ふ十二列國

の外

尚數の小國ありて共み此の際の間ふ浮沈せるも

のゆ

れども之れ所謂割據群雄の徒みして事頗ぶる繁

雜

み亘り今遂一陳ぶるうら代然れども列國の事跡を

記

すよ當り自ら其興敗を知くを得べし又春秋の

世

を過て周の威烈王の時ふも諸侯互ひ兵を

動して國を争ひ天下恰も共の如くとなす此の時より以後を史家稱して戰國の世と云ふ春秋十二列國の如きを未だ戰國に及むずして先づ亡ぶるものあり或は既に戰國に至りて後ち小亡ぶるものあり全く戰國の時小至りて其國の存して最も強きものを舉げたり則ち秦楚燕齊趙魏韓の七大國となす然して其内秦楚燕と春秋の旧國ふして齊趙魏を乃ち其新國なり之れ等の諸國も要するお皆お周の諸侯ふして悉く其下にお在るものありと云ふも實も獨立の國ふして各の其政事を異ふし決して周の政令を奉ぜず之れ其春秋戰國の名ある所以あり故に敢て周の中にお載せず今左小列國の各家を別ち以て遂次お之れを詳よせんと欲す

看者夫れ諒する處あれ

吳

吳の國を太伯仲雍お始まり其十九世の孫壽夢の時小至りて始めて大ひあり今其末歴を尋るお初め周の古公亶父の時古公御子三人あり長を太伯と云ひ次を仲雍と云ひ少を季歴と云ふ此の三子皆お賢明ふして能く父お仕へ各御中睦らりしお少子季歴也頃お至り御子昌と云へるを生みおひしお昌も非九の性實ふして成長の後將お聖人とあるの相ありしを古公深く之れを愛でおひ季歴を立て世子となし遂に家督を昌にお継がせお他日我家を興すらむと密小思案を巡らされしお季歴を素より嫡子おあらざれを流石お太

雅史記卷之八 長之七 下

伯仲雍等の前を憚り未だそれとも云ひ出でざりし古公
其内病ひお罹り玉ひ死後の事にも思ひ巡らさるゝの
様子なるより太伯仲雍の御兄弟早くも既お此の事を
悟り若し我れ等二人りの斯てある限りお父君の御望
も空しうらむと孝道深き兄弟おれを何日の間おやら
相談を整へ古公と季歴の御前をも薬を求めお行くと
云ひおし遂しお相伴ふて館を脱れお出で荆蛮の地を指
して奔り行き勾吳と云へる地お身を寄せおし後お季
歴の搜し求めおふことあるも再び貴き家を継おれさ
ふよお髪を断ち身を文げて風俗を改めし後お一も
蛮夷お伍りおとさなき世を忍びて居せしお實お陰徳
も陽報の種おや早晚荆蛮の人々此の事を聞知り義人

あり失ふべうらバと水の低きお後おが如く漸次お其
處彼處より慕ひ来りお末お其數千戸の餘お及へも素
より蛮國の誰れを憚る處もおく遠しお太伯を推して
此の群の君とあせり之れ此の國の始めおし之れを
吳の太伯と云ふ然れども當時尚中國と通せず國と稱
すも野蠻の部落お過す其後太伯お去せられて御子
の継ぐおさきものおく將お御後絶むとせしうも蛮人ま
と集ひて仲雍を奉りけるを以て仲雍遂しお其後を継
ぎおふ之れを呉の虞仲とあす夫より世々相繼で季簡
叔達を經過し周章の立て君たる時お當り周も既お二
を經殷紂全く亡び武王天下を一統し四民凱安維新の
御代とあり正お御一門の子孫及ひ勲功の諸臣お封お

推古天皇御代 卷之三 一 山名氏

と賜さるの時ありしを乃ち更めて呉ふ封せられ始
 めて公不諸侯の末位ふ加日れり周章薨して後凡そ十
 四世數多の盛衰を経て壽夢の代ふ至り始めて頭角を
 頭せり此時乃ち東周簡王の御代ふして周室の天
 下ふりしも王位衰へ政令行せれず十二列國の諸侯互
 ひふ強を争ふの時ふして所謂春秋の世ふれを兵力の
 外更ふ恐るゝものふく志あるものも皆ふ家を興さむ
 とするの折柄あるを以て壽夢も早く既ふ王業を成む
 との宿志ありて窺ふ兵を練士を厲ますすふ從事せり之
 れより先き十二列國の一ふて楚の國ふ夏姬と云へる
 絶世の美婦人たり鄭國の出生ふして曾て陳國の大夫
 へ嫁せし陳國之む為ふ騷亂を起して其君弑せら

れ國治んと亡びんとするの衰亂を速きあり後楚の大
 夫襄老ふる者に嫁し其夫戦死して寡婦となりしふ素
 よし花臉柳腰有名の國色あるを以て楚の君莊王之れ
 を納れて妾とさむとせられし此の國の太夫ふて
 申公巫臣と云へるものありて云ふ夏姬美わ美あり然
 れども不祥の婦人ふして之れを爲ふ身命を亡滅せし
 數名を歴奉深く其非を諫めて此事を止めしが又此
 の國の重臣ふて子反と云へるものあり亦之れを娶む
 せしうを巫臣再び諫めて之れを適へたり左れを楚
 姫の楚の國ふ在ふを益ふくして却て害を生ずるの恐
 れもやと楚王の命として夏姬を其本國ある鄭の國
 へ送り歸せし其後莊王薨して御子共王の時ふ至り

雅志類傳イリヨ 卷之三 口 山 名 大

巫臣齊の國不趣くべさの使を命せられ路不鄭の國を
過りて折しも婁姫の事を思ひ出で搜し求めて之れを
娶り使者の用を打捨て副介を依頼し已れ婦人と俱
ふ晉の國へ出奔せしつを初め婁姫を娶らむとて巫
臣不遽さられ彼の楚の國の重臣子及の事を聞き
知り已れを賣るとして大し怒り巫臣を楚の國に遣
し置きし婁子親族を屠殺せしり巫臣之れを聞て悲嘆
不堪へちさりとも予ら瑣碎の罪過を根ふし暴虐非道
の所爲らふと念怒骨髄不徹し何卒して楚の國を傾け
彼等の遺類よりらるる種々不工夫を凝して思ひ
付さけるよふ今吳の國も東方の海邊に在て中國と通
ぜず深く地を守て兵を出さざるを以て天下の人能く

其形勢を知らざれども兵強くして士凡の壯んあると
とホと恐るべきものあり我れ晉侯不説て之れと通せ
し以て楚の國を攻伐させあを予が一族の冤魂を慰
さむる不足るべしと遂に晉侯不説て此の事を翻め己
れ自ら使者とありて吳不趣さ中國車戦の兵法を傳習
し楚を伐むことを勧めけれを吳子壽夢の悦び大方ふ
ら凡直操其旨を兼諱し群臣と議して軍を整へ周の簡
王即位の二年秋八月遂に楚の國に進発し州来と云へ
る處に入りて戦ひを挑み之れを始として楚國辺境の
各所を侵伐せしを以て楚の君臣備禦不寧時なく從前
楚不屬せし蠻夷尽く吳不服後せしかむ日々強大の
勢を得楚國の外患とあり連年兵結んで解けず吳子ハ

間もあく借して王号を用ひ自ら稱して呉王と云ふ
 至れり壽夢子四人あり諸樊餘祭餘昧季札と呼し皆男
 子あり然し小末子季札最賢とく能く父の意も適した
 れむ之れを立て國を継ぐと先むとせし季札も諸兄
 と措て世を嗣むことを肩よとせず飽まで讓て家督
 と受ず其内周の靈王の二十一年不至り壽夢卒せし
 む長子諸樊遂し小家を繼り然れども諸樊の木意もあ
 らば兄弟讓て國を継ぐものあさより據ふく此不至り
 しものあれも身死するの後も弟餘祭を立て遂ふ季札
 も及ばし一も父の意を達し一も季札の義も報じむと
 欲し先づ季札を延陵と云へる地に封じ暫く此の處
 居らむ故に子して延陵の季子と云ふ呉王諸樊卒

其貴命も依り弟餘昧立て王とあるの四年中國の形
 勢人智の晦明を察せんがため季札を使節として諸國
 を巡回せし魯の國へ到り時周の樂を見古今國家盛衰
 治亂の由る所を評せし事あり季札行く道に北方徐國
 の君を訪ひし徐君季子の佩たる宝劍を見て頓りみ
 之れを賞賛し實も稀ある名劍とみと心中羨しげ不見
 へけれを季子既も其意を諒察り直も劍を解て徐君
 小典へむと思ひし今上國に使者として佩ける劍を
 失ひても兵國の體面も障るの恐れあるを以て先づ
 使者の用事を終り帰路まよと立寄りて之れを典へむも
 尚未だ遲さふありすと本意ふりも知りず面して徐
 君と別れ其後季子使者の用を終り帰路復徐君を訪ひ

一人生を誠み朝露の如く前の日まで最健あり
 徐君已卒して冥土の客とありきと語るべきもあり
 ざれを季子愕然として思へよと嗚呼先の日此の劍
 を與へよを徐君の望をも生前不達せし免我が心も安
 堵せしものをもと夫より徐君の墓所を尋ね此に至り禮
 拝をふし生たる人ふ云ふが如く君の心不適ひとふ
 れも帶拮びたれども参らすべしと劍を解て進み寄り
 墓の傍ある樹の枝に繫ぎ悄然として見て居しければ
 従者餘り不思儀の事思ひ季子に向て云へるよふ
 徐君已卒しむし今現よ此の墓の中ふあり君誰れふ
 劍と與へよふやと季子曰く我れ始め此の君を訪ひし
 時心己ふ之れを與へむと期せり今仮令其人死したれ

ちとして我れ生て茲に在り何ぞ最前の心不背く強けむ
 やと答へるり嗚呼季子の心能く己れを欺むるざるも
 のあり至徳を以て稱せられたる太伯仲雍の遠裔あり
 て此の義者あり今の世までも季子の義を稱して止ざ
 りもの亦宜ありと云ふべし季子國に帰るの後呉王
 餘祭數を楚と戦ひて互ひに勝敗ありしが其後間もあ
 く病み罹り卒去せしむ諸兼の遺命に依て弟餘昧國
 政を總て此の國の王とある餘昧卒して後群臣兼て望
 を屬したる事あるを以て此の度も是非に季子を立む
 とせし可き季子まゝ謀て後す於是一同大ひし落膽し
 如何すべきと討議せし先王諸兼深き慮ありて命を
 遺し兄弟交る國を嗣去めむとせられし今季子獨り

之れを聞きうす強くて逃に遁すする小ま至られを到り底に遺す命の如く
ある能も亦も左にれを近く王位小ま在り一の餘味の御嫡子を
以て世嗣とあすの外あしと群議茲に一の決し餘味の御嫡
子僚を立て國を繼ぎしむ之れを主僚とあす王僚立て五
年楚の國の亡び臣伍子胥来り帰す此の伍子胥を世に楚
の國の人もて名を員と稱す負の父伍奢楚の平王の太
子建の太傅たり費無忌まる者其少傅多り然る小ま太子
素より伍奢を信じて無忌を疎んす無忌常に寵を得ざ
るを憤り伍奢と太子を併せて罪に陥れんと之れ
を平王小ま譏構す其計策も巧ありと云ふへし一日無忌
忘太子の為小秦の國より婦を娶らむと平王小ま言上す
王之れを許可せり無忌兼て其婦類ひ稀ある美人ある

を知り却て之れを王小娶らしし太子小ま怨望の心を生せ
しの父子を離間し且つ己れを權を專しすの措梯小
せむと己れ自ら使者とありて秦へ到り帰て王小見へ
秦の女美人不して姿實殊凡あり願くも王之れを自ら
娶りむひ太子小ま更に良配を求めむと忠義らしく
申し上げれを実不諺も云へる如く之れをりも思ひ
案の外みて王疾庶人至るまでも皆か格別のもの本
りけむ平王直小此の辞不惑され秦の女を己れ小ま納め
ねて夫人とあし日夜寵愛せられける程小間もあく王
子軫を生めり左にれを無忌を類りし夫人小媚て平王小
取り入り今を平王小ま厚く信ぜらるを以て素よ巧み
みし事あれを伍奢及ひ太子を讓して之れを失えむも

のと夫より朝ふ出る毎人なき時を窺ひ太子婦人の
故を以て偏ふ王を怒み居すれを永く宮中不差置れん
こと誠ふ危き事候あど佞辯を巧みし諛けれを平
王も左ふくも婦人し溺れて軫を寵愛せりる。其折柄
なるをもて之れを造言ありとも思ひおそす太子の怨
望左にそあるべしとて楚の城下を逞か遠ざけ蠻夷境
の兵事を掌ること命とて他方居らば免らる無忌
も太子兵を掌れり奇貨として更ふ諛して曰く頃日
太子齊晉諸侯と結び將ふ乱を為むとすの御企てあ
り其謀己し集れりと王と夫人も告げたるより平王大
ひし怒りむし早速ふ伍奢を招ひて責め問れけりよふ
汝太子の太傅たれを常ふ能く彼が挙動を知るありむ

今太子外に在りて諸侯と結び我れ不抗するの企てあ
り然るを汝敢て我れ告げさるも何そや汝も太子ふ
一味せるもの夫とも知らずとなれむ之れを處する
の策如何あると様子ありげふ詰問せられければ伍
奢己ふ無忌の諛言あることを知り忠臣の鉄石恐る
色ましく我君己ふ父子の間人倫を乱し其過ち少しと
せす今復佞卒の諛を容れ君の過ちを重ねぬふあし忠
憤激烈の一言を祭するや否乎平王愈怒りて二言とあ
直ふ有司ふ命とて伍奢を捕縛し尚無忌の言ふ依て
奮揚と云へるもの命と太子を刺殺すべしとて遣さ
れしが此の奮揚と云へるもの忠直の心ありて事の原
因を知るが故ふ罪なき太子を殺すふ悲ひす己れより

先ふ腹心の者を遣せし早く逃れむふべき旨を告げ置
て其後より趣きたるふ付き太子も已ふ去り玉へり又
伍奢も伍尚も伍子胥とて二人の子より兄弟共ふ楚國
内の棠と云ふ領分を支配して居れり其地吳よ近し宮
中も無忌が参謀とありて夫々命令を傳へ伍奢が子
尚も子胥の兄弟を何れも聰敏の聞へあり若し此事を聞
て吳も通れば後楚も如何なる憂ひを引出さむと圖り
かさ依て父を質として之れを招くべしと人をして
伍奢も謂し二人を招うむるも伍奢曰く尚の人と
あり仁心あれむ呼ぶむらあられ来るべしと魚も子
胥も天性剛戾しして能く忍ぶ大事も堪るの資あり未
れも共し殺さるゝを知る故も決して来る事あるべ

るら彼と吾し王も無忌も欺むられて只一概も怒り
是れも招き寄て殺すしと使を遣して申されける
よも伍奢も子細ありて宮中も留置きたるも素より大罪
あるし何れ故も汝等を召して命する事あれむ使者
と共も馳せ参るべし若し迷を取て参上せさるも於て
も汝が父假令罪あくも死を免るゝ事ありとあれむ
伍尚直も至りむと云ふも子胥之れを制して云へるよ
も平王人となり暗愚もして定見も事皆も費無忌か
謀る處も委す假令我等兄弟召も従ふも父と併せ教
て後の患ひを除くむとするものも外もあらさむも輕
く行くべからば阿兄若し之れを悟り玉を暫くの慈
を忍び員も共も他國も奔りて父の仇を復すことを

務めよへと伍尚之れを聞て決を流し我れき汝と意見
を等しせり然れども父も棄ちらるる名も廢すやうり
代今父を免すの君命を聞て行ざらば孝も非るあり死
を知りて避るハ勇も非るあり我も孝と勇との名を全
ん父兄戮しある之れを報せざるやうり我れ知略ハ速
く汝も速をす汝ハ身を全し是よ王吳も奔り後時父兄
の仇を復さん事汝粉骨努力せよとの一語を今生の
別れとして遂に使者も捕まれけり父子刑も臨み眞の
卒も未らざるを聞て微笑して曰く楚の君と大夫と今
よ王枕を高くするの時何するまと言終て戮せらる子
胥も使者の己れを捕まむとするを拒ぎ辛して家を
逃れ出で太子の宋の國も居せるを聞きて之れも趣く

途もて此事を聞き憤懣措く能もざれども又さ如何と
もすべき術あく何と免もあれ太子も巡り逢ひ其後
て縁々事を謀らむと夜を日み継て宋の國も趣き果
て太子も出で會ひしが此の頃宋の國もも君臣権を争
ひ兵乱の折柄あれを太子と俱も鄭も奔れり鄭君其の
冤罪を憐み待遇殊も厚し又さ晋の國も趣きし晋の
頃公太子建の鄭の國も親しきも依り爲も内應をなさ
しめて彼の國を奪ひ太子も與えむと太子を唆うした
るより太子前後の辯もなく殊も信も背て内應をなさ
むと復鄭の國も趣きしが事幾覺れて遂も誅殺せらる
於是伍子胥太子の御子勝と云へるを伴ひ遂も呉の國
を志して奔る然るも伍子胥の楚を遁れしより楚の國

雅史 卷之三 三

小於ても子胥の吳小至らんを恐れて國內も云ふまで
 もなく隣國の諸侯まで嚴重に搜索し現小昭関と云へ
 る關も兵を構へて警察せるを以て何物も其形容を
 やはして吳小入らむとせし幸ひ前小鄭の國を脱す
 る時と実小焦眉の急ふして路費の用意とてもありさ
 れを今も朝夕の食事をたふし心小任せす勝と共小夜も
 山林小入て雨露を凌ぎ昼を村里を訪て食を求めしか
 らも其嚴重蟻も漏さず左れども英智の伍子胥あきを一
 良種の策を以て関を駭し其隙小乘りて門を脱け出で
 しか此の策素より一時の謀畧小直小頭れ追兵の至
 りむこと必定あるを以て後をも顧み疾走して吳江の

河邊小達し水面遙小見渡せを唯渺茫として限りなく
 更小一葉の船だ小見ざれを心急ども詮術なく暫し
 小間猶豫する折柄昭関の守兵等昨日既小伍子胥の関
 と脱け出たるを覺り汗馬小鞭て雲を撮へ砂煙を蹴立
 て追ひ掛け来り彼方の山蔭小隠見する小を子胥振り
 廻り見て攀を握り嗚呼我君臣の危急咫尺小迫れり天
 運の極まる處亦如何にもすべらばと勝を顧て覺
 期を促し將小自刃せんと意を決し今迄蓆苞みよして
 携へたる劍小手を掛し此の時遙の水上小一漢夫
 あり誰をも知らぬと旅人の様子ありげなるを望め急
 小船を走りせて岸小近さ何やらを声掛けたれを子胥
 此の物音小心付きて船の来れを知るよこまに天道

の我等と捨て去りざると勝を携へて船に飛入り漢
 人我等の急を救ひ早く對岸に至りしめ我他日去ふ
 ぬるの日に深く其恩を報ゆべしと云ひければ漢夫回
 答をもせず船を出し矢に擲を推して荒浪を切り開
 き漸くよして對岸に至りしめ子胥始めて蘇生此
 思ひを急き河岸に打ち登り漢夫謝して
 云へるよふ我等足下の仁心に依り萬死の難を免るし
 ことを得たり再生の大恩死すとも猶忘れず然れども
 今日の有様を食ふも芳り仮りふ此の場の勞を慰する
 事能はず此の劍を或る王侯より棟領の品よして直ひ
 百金に當れを賣て之れのみも参すべしと帶たる劍
 を解て差出せを漢夫辞して受取らず今楚の國の法に

伍子胥を捕へて差出せを粟五万石を賜ひ位諸侯に列
 せらるの發令あり左れども我れ之れを屑とせず將軍
 と正し其人あることを知て救ひ参せたり豈何を百金
 の劍を望むやと云つて船に棹ざり何處にもおくなり
 ぬけり子胥之れを見送て夢の如く天を仰て選擇を
 暫し言語もまかりし早や其内追矢の前手向ふ
 の岸に近づきければ斯てあるべき場合あらずと勝と
 諸共道道を急ぎ日を経て吳都に達しける吳を此の時
 四方小事を用ひるの時にして先王諸樊の公子光と云
 へる大將とあり尤も威權ありしを子胥之れに依
 て吳王僚を見へ専ら楚を討するの策を講し之れより
 遂に兵の國の臣とあり王僚立て八年楚の邊邑の處

女呉の邊邑の處女と桑を争ひし事ありしを遂に兩女
の家相戦ふ至り事公の沙汰とありしを呉楚素より
不和あるを以て楚國邊邑の長之れを怒り呉の邊邑を
討ち滅せり呉王之れを聞て大に怒り左あた子討べ
りし楚の暴狀決して捨置べきとありれば公子光を
大将として数万の兵を授け楚國を指して進發せしめ
しむ楚の國ふ於ても此の事を聞知りし兵を出さ
して防ぎ戦てしめし呉兵の鋒先ふ數度利を失ひて
將卒大ひふ疲勞せざるを以て呉の師勝ふ衆ト敗兵を追
て深く攻入り遂に楚の繁華ある居巢鐘離の兩都を授
て歸れり子胥當時呉の朝ふあり楚を討て我が仇を報
ずるに北の時ありと思惟し再び公子光を大将と

して楚を若しの遂に其國を亡む事を説き頻りし王僚
を勸む然るに公子光も今王僚を仕て臣下し列し專
ら呉の爲ふ事を謀ると欲とも實も時機ふ成して自ら
王位を奪ふの陰謀あるを以て子胥を説く處の理も當
れるを聞き窺ふに愁て思ふに我れ未だ大望を果さ
ず數々他國の戦争ふ出なむ戦ひの趣ふ依り遂に死
を致さむも知りざし由戦ひの爲ふ過まらざるも終
始外ふ在て國政ふ興らず目下王僚子胥を用ひ内外の
信用を固ふたらむと速もま志を遂ること能は
ず若し今ふ當り子胥を退け徐ろし謀畧を巡らさむ
とと窺ふ王僚不見て云へるよふ子胥類りし楚を
討む事を勸むと雖も決して呉の爲ふ謀るものあり

凡彼れ利害をも顧みず只一概ふ己れが父兄の仇を報
 むと欲するのみ大王若し之れを悟りむす徒ふ無名の
 師と起しむへむ呉の國も遂ふ子胥が楚へ入る。聚とふ
 りむのみ願くも少く意を注ぎまへと色を變して諫
 めければ素より思慮淺き王僚却て光の深き巧みある
 を知らず夫れより何となく子胥を疏し兎角ふ敬して
 遠ざけるの様子ともなれり子胥之れを見て已ふ光の
 内志あるを知り我の望も未だ達するの時至らず徒り
 ふ朝ふ立て謀口を招くんよりと王僚ふ請て官を辞
 し庶人とありて勝と共ふ野ふ耕しける公子光此体を
 見て深く喜び尚機ふ衆して子胥を説き落し之れをも
 味方ふ招きなむ大望成就疑ひふしと或時間行ふ城外

ふ出で伍子胥が假り住居ふ尋ね至り禮終て申しける
 よふ先生兼ても知らる。如く我れを先王諸樊の長子
 ふして正ふ此の國の嗣子たるべき身あるふ故ありて
 兄弟交る國を継ぐむるの遺命あり左れをこそ我父諸
 樊薨してより二代も餘祭餘昧の兩叔國を継り故ふ餘
 時薨して後も末叔季子の世を継ぐ登き答ふるふ季子
 も謙遜深くして位ふ即く事を肯せず此の時ふ當りて
 も宜く尋常相續の法ふ從ひ先王の嫡子たる我れ位を
 踐べきこそ當然あるふ王僚禮を辨へず長上ふ先ず我
 れ常ふ心平のなる能はず依之時もあらむ王僚を殺し
 て自ら國を支配せむと思へり先生も誠ふ當時天下の
 英才ふして然も我呉の爲ふも非常の恩人あるを以て

若し我れを扶けて志願を得しむ一を我れ誓て先生
の為ふ楚を討て其宿仇を散せしむべしと實を明て語
りけるふそ子胥今更驚きし体もあく暫く黙然として
思案の体ありしが稍ありて答はるふ公子此の大望
を包まず不才の我れ告げふ事弓箭の面目何事の
之れふ若むと己ふ一味左祖の旨を陳むとせしが心竊
ふ思けるよふ我れ王僚を弑するの扶をふせと自ら身
を以て不義の罪に陥れざるを得ずなりとて之れを聞て
迂濶ふ拒む時と公子却て我れを計るふ至り大望ある
身を誤るの恐れあらむ若し別ふ良國を求めふとと暫
く沈吟して光ふ向ひ曰く我れ聞く大事を計るものも
必ず死士を養ふざるべしわらば公子此の拳を遂げむと

欲せむ別一人の人物を用ひよ一我れ其人を周旋す
べしと乃ち專諸と云へる勇士を進め後其成行をのみ
待ち居たり公子光も伍子胥の周旋に依て專諸を用ぬ
しふ聞し違ぬ勇士ふて膂力萬人ふ勝れたれを一
方の大事を托するふ足るべしと深く寵愛して時節を
見合居たりしが實ふ光陰を失よりも早く兎角する内
五歳の春秋を迎へて王僚十二年の冬ふ至り楚の國の
平王病ふ依て薨せしむ王僚群臣と議して云るふ
よふ楚國今喪ふ服して内外の人心動搖の折ふれを必
定軍備緩みたるあらむ我れ思ふふ彼の國を併吞する
と此の時あり汝等何の意見ある群臣之れを聞て皆
一同ふ曰く大王の神筆誠し當れり宜く速ふ軍馬を整

雅 俗 卷之三 三十一

へて進發すべしと於是出陣の吉辰を撰み先づ王僚の
 御子蓋餘燭庸の二人を元帥とあし之れを兵十萬を授
 けて進發せしめ列國若し楚を扶くるの事もやと兼て
 賢明の聞ある叔父季子を遣して其變を觀しむ楚の邊
 邑の大夫此の變を窺ひ知り駟を飛して之れを其朝に
 報しければ楚も此の時平王新に死して幼君昭王位に
 在りし諸臣と合議して謀畧を定め水陸の兩軍を發
 して吳兵の後を絶ち別に一軍を以て正面より攻撃せ
 しむを吳の兵討するもの數を知らず前後に敵を受て
 退く事能はず空しく圍の内に入りて唯木國の救ひを
 のみ待ふける吳の國も此の時公子光あり今日の機
 會失ふべかりばと兼て暱近の專諸に告げて曰く我れ

も真に王の嗣たり諺にも云へる如く索ざれば何を獲
 んと今正ふ之れを求むとす汝の意見如何專諸曰く君
 速に王僚を圖すべし蓋餘獨庸其他宗徒の諸將外も在
 て歸る事能はず朝中亦虞ふ足るものあり今日の時誠
 千歳一遇の機あり然りと雖も僕老母と弱子あり之れ
 を如何せん先日我の身ハ汝の身あり後事を苦慮す
 るありれと於是二人謀計を定め甲士と先か即ち伏て
 王僚を招き酒宴を聞く專諸と首と矢魚の腹中にお置
 其隙に乘り之れを拙て直に王僚を刺さんとす王僚の
 侍士驚きと劍を抜て左右より專諸の脇腹を突き專諸
 せず遂に王僚を殺害し己と王と共み驚き先王僚を殺
 得て意氣大に上るが如く直に朝に至り自ら其兵を

惟之の事也

十一 山名氏

指揮して己れを守らせ王僚の代て王位に即く之れを
 吳王闔廬とあす王僚の公子蓋餘燭庸此の變を聞き切
 齒とあすの思ひあれども身も大兵に圍れて其中に在
 りを之れまゝ如何ともすべからば二人相議して遂に
 其兵を以て楚將の軍に降服しけれを楚之れを舒と云
 へる地を封す又前も他國に使せし季子も帰る未だ此
 の變を聞きしものも素より諒達深き人あれを敢て之
 れを為し其非をも咎めず朝臣に向て云へるよも荀の
 小も先君の祀りを廢するなく社稷を奉するあれを乃
 ち之れ我君あり我れ何と云てむやと先づ王僚の墓
 に至りて泣きて其使命を復し帰て元の位に即き謹んで
 闔廬の命を待みける此變時小周の敬王御即位五年

ふ富きり國に立て位に即くや直に伍子胥を用ひて行
 るとあり又楚の亡臣伯嚭を用ひて大夫とあり之れ
 等と共に國事を議し常小軍旅の事を務め未だ曾て一
 日も急るなり國に立て三年又楚を討むと欲し伍子胥
 伯嚭等と議し兵を起して先づ舒に至り前も楚に降て
 此の地を封せられたる吳の二公子蓋餘燭庸を圍む二
 公子百方力を尽して防禦すると雖も孤城を以て大
 兵に取られ圍まれたれを戦ひ自由あらざるも殊に吳の
 軍も子胥伯嚭あど云へる何きも楚に仇ありて飽ま
 りて戦ひふ氣を入れたるものあるか上も名より負ふ兵
 法の達人ある孫子ありて謀略すべて神の如く將卒皆
 お飛龍の勢ひあるを以て毎戦連りお敗北し遂に城陥

御史別歴代小史 卷之三 十一 日

りて討死せしめを固盧勢ひふ乗し直ふ楚の都を押し
 寄むとせし孫子頭を掉て之れを拒み戦ひ勝て驕ふ
 ものも必に敗す恐れあれを一先穂ふ軍を返し銳氣を
 養ふて糧食を蓄へ時至るを待て楚ふ入るへしと舒の
 地守りを置いて軍を収め呉の本國ふ帰りしか乱者の人
 心却て無事を厭永く寧歳ふ安ずる事能たず舒より帰
 て未だ一年ふ足らば固盧の四年まゝ兵を起して楚の
 六潛の地を略して帰り五年まゝ越の國と戦ひ大ひふ
 之れを破る楚の昭王此の事を聞き今呉王固盧越ふ勝
 て將卒驕りたる時おれを宜しく速ふ此の機ふ乘し呉
 を破て積年の恥辱を雪ぐべしと公子囊尾及び令尹子
 常の兩人お兵を授け楚の都を進發せしめしを兩人

を兵を併合して直ふ呉都を襲むむと日夜を兼て一散
 ふ駈け来りし呉の軍の未だ越ふ在るもの此のよし
 を知り楚兵自ら敗を贈るる直ふ引返して之れを呉
 の國豫章の地ふ迎へ楚國の弱將何處ふ行むと欲す我
 れ等越を伐て此處ふ来り餘銳を漏さす苦むの折柄
 あり幸しふ餘り箭の馳走を振舞むと兵を指揮して攻
 め掛れを楚兵紫外の處ふ敵し會し周章狼狽大方ふら
 凡未だ戦ひ教合ふらばして見る影もあく敗走し散る
 ふあつて引揚けれを呉の師透さす追撃し遂ひ楚の
 地まで攻め入りて居巢を陥れ勇々として凱旋せり
 其後三年を経て固盧の九年ふ至り王子胥孫子の兩人
 ふ問て曰く我れ久しく楚の都を襲むむと欲するの心

あり常ふ此の事を遂げむとせし子兒角ふ時を待
 とて制されし故空しく手をこまひひて年服を移し
 徒らふ三歳の春秋を迎へたり我れ思ふ大夫乱ふ
 生れて沈黙時を過すべからば況や人生限りあれを
 遂ひ目的を達せず空しくなりむも知るべからば二
 子尚楚ふ入るの時至らずと云ふるは子胥孫子謹て答
 て曰く楚の将子常當時勢ひを得て内外を壓し専ら貪
 欲を肆ふし内も楚國の人心和せずして外も唐蔡の小
 國深く之れを怨む王若し今日楚ふ入りむと欲せむ先
 づ手段を以て此の兩國を味方とあし正しき名を以て
 之れを討む楚都ふ入りむ事難ふあらばと言上りけれ
 む閻盧最もと同一早速使者を派して唐蔡の兩國不至

らし楚の暴状を討つことを報せりし、ふ彼の兩國深
 く喜じ兵王の進発あるの日も早速兵を引て夏口を會
 御軍令相待申すべしと相答へ一議ふも及む兼諾
 けるふを左れを時節を移さず速に進発すべしと夫
 々の軍議整ひて頃しも周の敬三即位の十四年吳の師
 悉く打立ち楚の國外れある夏口の地を望み押寄せけ
 れを兼て期したる唐蔡の兩國もまゝ兵を發して地處
 不會し其兵幾万と云ふを知らず勇氣凜々として皆ふ
 破竹の勢ひあり吳の大元帥孫子諸兵を點檢して隊伍
 を調へ先づ手始めお一手の兵を出して巢城を圍み戰
 ひの様子を試むるは楚の兵の巢城は在るもの地の勢
 ひふ怖け出戦もむとするものなく堅く鎖して門を

開らす別駒を飛して楚の都に報つけれも楚の群臣
俄ら相集て會議を開き子常大将とあつて兵を總領
し夜を日み継で路を急ぎ漸く漢水の邊まで駐付し
河の向ふと既し吳の軍も填り今も渡り未むの趣き
あるを以て此處を界し防むと令を下して諸兵を止
め木を狹て陣を張り斯して對峙するごとく數日及びけ
るも双方互ひ猶豫して戦ひを挑まされも吳の軍も
兵法不熟達せし孫子伍子胥の如き老練の軍士あるを
以て敢て軍機の沮みたりとも見へざれども楚の陣中
と何となく銳氣の緩みたるが如くし將卒皆急
りの色顯れければ此の時軍中もありし吳王闔廬の御
弟夫槩王も見て曰く敵守備も怠りたる色ありて軍機

正し熟せり請ふ一戦して味方の兵氣を勵すべし王曰
く軍中の事元帥あり宜しく其令を待べしと夫槩其陣
中歸り為以て王既し我を兵も將たりしむ兵の事之
れ勝事を以て要とす今戦ひ勝の時至り何を苦で猶豫
することせむ好し我れ兵を出して思ふ可まふ敵
を悩まし其上よて軍令も服さむと將校も相談を
さすして謀界を案し自ら率ひる處の部下五千の兵を
以て其夜窺ふ軍を忍び出で御導を求めて漢水の彼
方に廻り楚の大將子常の陣を目撃して不意に襲ひけ
れ彼の陳狼狽して敵の何物たるを知らず皆お毎口不
何事あるぞと呼りつし右往左往し掛け懸ふも夫槩
充分踏込み我れも吳の部將夫槩あり子常何處にお在

惟る

早く出て我馬前降れと大音不呼たりあから兵
 を指揮して切り廻りけれを子常始めて敵の夜襲ある
 事を知り敵も小勢あるぞ早く備を立て追ひ崩せと前
 後ふ馳て令を傳ゆれども乱れ立たる兵卒等踏み止ま
 らむとすするものもあうりし早や其内ふ楚の陣々ふ
 て大将の陣ふ夜襲ありと追々救ひの兵来り備を立て
 夫概を圍み一人も餘さりと操み立たるふそ夫概敵の
 重圍を受け戦ひ稍や固難不見へし折しも吳の陣ふ
 て元帥孫武子陣營を見廻りて漢水の河進く趣き楚の
 楚の陣の動揺するを望み儲て夫概軍令を用ぬ敵陣
 へ夜襲して圍まれし直ふ馬を飛して戰場ふ趣き
 附屬の兵を以て本陣へ告げ知らせ終出兵の令を傳へ

けれを何時も非常を警めたる吳の軍あれを少しも狼
 狽たる氣色ふく隊伍嚴重ふ繰り出さし楚兵一人も遁る
 事あうれと騒ぎ立たる真後より面も振らず衝て掛
 れをすわ救ひの兵マ来りたり備を分て之れを防がと
 後陣俄ふふ動揺するふそ敵前より圍の内ふ在りて若
 戦軍中ある夫概此の体を望み味方の兵来れるそ兵士等
 戦ひを勵むで連絡を通すべし自ら馬を躍せて真前
 へ進み縦横無人ふ切り廻れを部下の兵士等も勢ひを
 得て互ひふ武勇を顯しけるふそ楚の軍大勢ありと
 金ども此の勢ひふ尚り雅く前後の敵ふ氣後させし様
 子ふれを吳の大將子胥孫子を始め早くも敵の敗徴を
 覺り楚兵の足並浮たるそ真一文字ふ駭崩せと金鼓を

雅支那歴史

卷之三

二十一 山名

鳴いて号令を傳へ面を揃へて衝て入れを楚兵討ふも
 の敷を知らず屍も積で山をふし血も漢江を染ふ
 て紅ひの水を流せり楚の大將子常此の有様小遊易
 敗兵を卒して一方を切り破り五六里引退ひて陣を取
 る吳の軍もまゝ長追ひをなさず兵を纏めて暫く休息
 の令を傳ふ時子吳の陣よても思ふまゝ小敵を破り壯
 士皆勇々として居たり一人の部將進み出て曰
 く楚兵今戦ひ疲れて防戦の氣力あり我軍此の機に乗
 じて急小功立てるをあらば彼の大将を生擒すべ
 し子胥夫槩等之れを制して曰く究鼠却て猫を喰むの
 恐れあり彼れ今江口小屯して前小進む道あり我兵後
 より之れを攻む時其進退小苦むを以てうあらば死

を決して防ぎ戦ふべし前途未だ遠けれも徒ら小決死
 の兵小當るべられば若し今夜敵の漢江を渡る小乗
 後より之れを追も彼れ前小進て遁るゝと目的と一後
 小振返して戦ふの氣あり之れを以て敵を討の謂ひ小
 して勝利のあらば疑ひありと利害明ら小辨しければ
 皆お志もと之れ小同し其時をこそ待小けし楚の大將
 子常も吳軍の謀計あるとも知らず一度漢江を渡りて
 敵を速け更小銳氣を養ふて本國の救ひを待たむと夜
 半窺ふ令を傳へ先陣より追々江小差掛り軍半も水
 渡りたる處小兵の介侯斯と告げ知らせたるより謀計
 圖小動れり追ひ討を掛て塵ふせよと吳軍一度小攻め
 掛り矢石を飛して悩ましければ楚兵狼狽へ馳で道場

と失ひ江中へ溺れ死するもの其數を知らず子帝愈々
 氣後して号令をおすの力なく斃れたる死卒の上を起
 て漸く漢江を渡り僅らふ計漏されたる手兵を引纏め
 後とも見づぬ遁げ延びぬ道ふて思ふ我れ不肖と
 魚ども赫々たる楚國の大將として吳兵を退せざる能
 はず云ひ甲斐もなく敗軍して何の面目の楚へ帰る事
 を得むと夫より道を北へ取り鄭の國を指してを落行
 さけり吳の軍ふても仕合よと皆ふ一同に打喜ひ之
 れより長驅して楚の都郢を攻め入らむと兵を進めて
 敗卒を追撃し或も戦ひ或も追ひぬと経て遂ひふ都
 近く攻め入りけれを昭王大に恐怖せられ朝中の群
 臣を召し高議せらるるよふ楚國の兵ふたは漢江を以

て第一の要害とあす今吳の軍北の要害を棄取り已ふ
 都近く押し寄せたれを何を以て防ぐ事得む後らふ手を
 東ねて虜とあるより寧ろ遁れ出て他國へ至り後ち徐
 小再舉を計るべしと群臣之れ不同するもあはれを又さ
 王城の兵を以て必死に防戦せんと云ふもありて群議
 未だ決せざる處ふ兵早や都へ亂入して其處彼處ふ
 火を放ちければ今も之れまでありと脱走の用意をあ
 子西申包胥と云へる面々共み昭王都を立退さ
 玉ふ於是兵の軍も楚の敗卒を追ひ拂ひ郢の王城を奪
 ふて味方の本營とあり左右ふ兵を分て昭王を求めけ
 るふ已ふ着定て其行衛分らちまふ兵を引て敵するも
 のもあはれを此の日も令を下して軍を収め夫々軍功

ある將士を慰勞して次の日小至り任子胥吳王に向て
云へるよふ照王暗懸して善惡とも預り知らず只
人の惡を處のものも平王貴無忌の輩あり然るも今死
して罰するの道ふけれども其墓を發て屍と取らむべし
と吳王國虛最の事ありとて乃ち子胥伯嚭等を従へて
平王の廟所小至り士卒小命して其墓を發しむるも平
王薨して既ふ十年及べども其屍尚持ち依然として
形を存せり子胥之れを見て声を勵まし汝倭臣の言を
容れて忠臣を斬殺し尚飽き足らず我れとまで捕へ殺
さむとせり丈夫の心情果して空しあらん代今正ふ父兄
の冤魂を慰さむるの時至れり汝地下小控て我が父兄
小對し尚何の面目の何る積惡の餘失思ひ知れと鞭を

執て屍を打ちけれむ死者語らずと金ども生者各情あ
り満場の將士皆ふ栗然として扱へたり去る程子胥
を吳王小依て思ふ可まふ父兄の仇を報し積年の宿
怨を散らたれむ只此の上も已れを勵まして吳國小報
ずる處ありむと王と共ふ楚の王城小在りて伯嚭孫子
夫概を始の之れ等のものと攻伐の事を議して居たり
小兒角する内城の年も過て明れむ周の敬王の十五
年即吳王國虛の十年とあり人々遠征の中小新玉の年
を迎て他國の春もまゝ珍しと軍旅の暇も遠地近地
を拔渉して迂濶ふ年月を過しぬる處も話説代て越の
國も去年吳王の楚國小進發して望の外小款を破り
當時尚諸明臣と共ふ楚の王城小在り吳の國全く空虛

推し下す

二一七

ふるを圍り此機失ふべからばと兵を起して吳を圍
りと羽檄櫛の齒を挽くが如ふれを諸臣大ひ小驚ひて
直様師を斑さむと云ふ小吳王楚を捨て去る小忍び
越の允常能く何事をあふさむ宜しき一予の大將を分
て之れを逐ひ返すべしと一人の部將と帰して自國の
難を救ふの尚依然として楚都を去ら初免子胥申
包胥と友として交深し子胥楚を去るの日包胥小逢て
云ふ我れ後日必ず楚を亡ぼさんと包胥云ふ君能く楚
を亡さす我亦能く之れを與さんと答へる是れを
包胥秦小走り救の兵を秦の哀公小求め七日七夜の
秦の政府小立ち節吳哀訴せるを以て哀公其の誠忠小
感し直小援兵の指し令りて秦の大軍楚國を指して進

發し吳兵を殺しといふ地小打敗れり吳王内外敵を受る
のみふらす又不慮の内乱を来せり其も戦乱の由の
定めふき骨肉の親も尚且頼みなく今で吳王の懸代
として心許せし御弟夫概忽ち謀叛の氣起り吾國王嗣
小定めふけれを脊力あつて王たりむもの敢て誰れ彼
れの差別あるべからん況や騷亂の由の今日小たてお
や七或日竊う小楚の陣を脱走し本國小帰て大禮を潜
行し自ら吳王と稱しける小を闔盧北の事を聞て大し
小怒り彼れま遺難おらしむと今を發して楚國
を打釋て國小帰り夫樂を攻められければ夫樂尚未
根據定まらざるを以て之れを拒む事何と生ず楚小奪
て昭王小降る茲年楚の昭王秦の救を得再び郢の都を

雅史別傳 卷之三 二十五 山名

復し王城ふ入て夫榮の降参を許し之れを堂谿と云ふ
 地ふ封卜て堂谿氏とよす吳王も茲年の内悉く他の
 兵の侵伐を防ぎ翌十一年ふ至りまゝ太子夫差と云へ
 ると大将とて楚を討む之れより後七八年別ふ他
 方と戦ふ越を討むことを目的として専ら國を富し
 兵を強ふることとをのみ勤め居たりし吳王の十九年
 乃ち周の敬王の廿四年ふ至り越の允常薨して其子句
 踐始めて王号を用ゐたりと聞き吳王闔廬大ひ喜び
 我れ越を討て多年の宿望を果さむこと將ふ今日ふあ
 り此の機會失ふべからばと兵を勤めて進發せられし
 ふ越王句踐もまゝ等閑の性質ふらず終始吳國の挙動
 子眼を注ぎ殊ふ大夫種范蠡あど云へる明臣ありて常

ふ之れ等の付け置きし間謀のものあり吳の軍越ふ向
 かと聞や越軍亦手を取ねて敵を待つ事をせ亦直ふ
 軍を整て鬯を以て遠く之れを吳國の檣李ふ迫へ死士
 を放て戦と挑ましむれを吳王元未短慮の氣實ふして
 之れを忍ぶこと能ふ自ら馬を馳て陣前ふ躍り出で
 群りたる越兵の真中ふ切り入りて縦横無尽ふ難ざ立
 つるよを吳の軍危しと見て續て殺到せしか素より無
 謀の戦ひふれを越軍の大勢ふ取圍まれ遂ふ散々ふ敗
 北し吳王もあたるふ手傷を蒙れり於是吳軍大ひよ
 氣後れし只王を救て圍を遁れむと攜李の城下を指し
 て敗走し其後本國ふ遁げ帰れり吳王の本國ふ帰るや
 傷所の悩み特ふ甚し危篤ふ迫りしを太子夫差を

信長月原イハシ 卷之三

山名氏

召して曰く汝越人の爾が父を殺せるを忘るるあらねと
 言終て遂に薨す於是太子夫差繼で呉王となり伯嚭を
 以て太宰とふし専ら射戦の方を習練し越を討むこと
 を務め常々朝中へ出入するもの命じて夫差汝越人
 の爾が父を殺せるを忘れたるかと呼しめ以て自ら其
 心を勵ます呉王夫差の越を思ふこと如斯なれを先哲
 云へる如く陽氣の發する處金石まじり遠り精神一列何
 事あらざらんの道理よて未だ二年も足らざるも兵
 強く糧足りて何時越を討も妨ふさよ至る於是子胥呉
 王夫差を奏して曰く我兵既も熟して用ゆるも足れり
 猶豫して越を先を制せらるべられば呉王と之れも
 同し將も越を討むごとく攻進の準備も取掛る時も越

王勾踐呉王の久しく怨みを懷き早晚越も事あるを了
 知し思ふも防禦の時日を徒費せんよ王寧我れより逆
 寄して呉の未だ備へざるを討むと范蠡も向て謀を問
 ひけるも蠡曰く兵も凶器にして戦ひも逆徳あり輕忽
 小事と起すべられば殊も呉王夫差久しく越を仇とす
 其鋒のならん鋭ららん先々禍も我れより迎ふるも及
 むす彼れ我を討むとせを宜しく兵を分て之れを防が
 んのみと越王曰く否然らず先ず人を制すと云へ
 り我れ彼が父闔廬の勇猛だも一戦して之れを挫げり
 夫差が乳臭能く何事をあかさんと遂に今を發して師
 を興す呉王之柁を聞て大い激怒し勾踐我れを後前
 の大差ありと思へるも好一戦も駈前して前の橋李姑

推

リ

蘇の敗れ報すべしと子胥伯嚭専殺など云へる吳國鋒
々の面々と本國の都を發し軍を水陸の二手に分て越兵
を夫椒と云へる處に迎へ前後より圍を攻め立つれも
越軍もまた弱きふあらねども遠く界を出て地理に疎
きと吳軍の銳きと依て思ふまじく兵を動する能は
ず毎戰皆敗れて殆ど支へるの術に窮し計漏された
る手勢僅に五千をり甲士を引て敵地を切り抜
け本國越城と望んで敗走しけるよを吳の軍子胥が令と
して急ふ追撃し短兵を以て城下は迫りけれも越王愈
よ究して為す處を知らず大夫種范蠡ふと云へる股肱
の臣と供ふ必死の苦戰を以て漸く血路を關らさ王城
の北會稽山と望んで之れに遁げ入り腹心の即等を以て

楯籠りし吳軍漸次不集て雲霞の如く密布繞圍めて旌
旗數十里に連亘し金鼓の聲内外に震ひ蟻と漏さしと
諸の掛けたるを越國の亡滅目前に迫り其様恰も夙前
の燈火に似たり越王句踐勇ありと金と首を垂れ氣
を喪ふに悄然として范蠡ふ謂て曰く我れ不敏にして
先生の言を聴かず遂に此地に至る前途如何ある術を
以て我の社稷を保つべきの范蠡曰く既往も追べり
れば前途の謀略こそ肝要なり臣聞く能く一人の下に
居するものもあらば萬人の上を伸むと云へり大王
若し再び越を興さむと欲せむと宜しく辞を擧げ禮を厚
くして表裏を復れし降服し復り其言ふ處に徳を營生
命と全ふし然して后まは續々興復の事を計圖すべし

命と全ふし然して后まは續々興復の事を計圖すべし

夕一議も及まず其旨も同し早速大夫種ふ命して
 呉軍の木營に到りし其王夫差を見拜伏云く玉めて
 曰く亡國の衆人臣句踐を以て自ら擗りて大王の檻下にお白さ
 じむ句踐區々の身を以て自ら擗りて大王の檻下にお白さ
 抗し彼りよ罪を大王にお受け悔しむ及もす今正にお大王
 一視同仁の至徳を全れ賜ふて句踐の残生を饒さるし
 ことを得を臣句踐謹んで國土を奉り身も奴とあり妻も
 大王の待女となし生涯永く其徳を忘却せずと呉王
 之れを聞いて心竊に哀憐の情を起し異議なく將お許さ
 るとせられし子胥傍にお在り呉王と謀て曰く今天越
 と吳國にお賜ふ豈之れお背て受さるべけんや況や越も
 吳國の仇敵にして七世の怨あり左にむを將お皆お

心を併せて寢食を安んぜず今お漸く仇を復す
 小至る然るお大王若し之れを許しお後大ある悔
 あらむと呉王之れを聞て離然悟る處ありて曰く句踐
 戦ひ勝を我れを虜おすべし我れ今戦ひ勝て何を汝等
 君臣を許さむ汝等て宜しく誅戮の日を待べし其株
 物と共に種を造ひ返さる大夫種會稽山にお帰て此の事
 を告げられむ句踐天を仰て大しお嘆し將お妻子を殺
 して決戦せむと欲す種を盡と俱し謀策を献して曰く
 呉の太宰嚭常にお貪て能ざるの生得あり宜しく彼れを
 誘ふお利を以てし再び成否を試みむと此の時會稽にお
 後へ来れる美女及び金珠珍翫の寶物を以て伯嚭にお賄
 ひ再び大夫種をして呉の陣にお到らしめ佞弁を巧みお

して家傳を許ふ子胥まゝ侍ふ在て吳王を諫む句踐素より才徳ありて辛苦を忍び且種范蠡の二良臣あり若し許して越城ふ帰りのも所謂虎を野に放つ小伴く再び今日の機至らず大王決して許しお事おれと道理を尽して王を勵まけれども太宰伯嚭既小越の賄賂を受辭を飾て曰く夫究鳥懷ふ入れを獵夫之れと殺さず今越王辭を卑ふし志を降し俯伏謝罪せるものを殺戮しおつを大王未蘇の徳を損し天下其不仁を抑て遠ふ来り帰すものあらと傍より弁口を以て王の心を動かしおのるを以て一時の仁ふ成績を許り遂ふ越を許して國ふ帰らしおの口を期して質を免す事を命ト置き兵を解て吳都ふ凱旋せらるは是越王句踐も

恥を忍ひ辱を含んで萬死を免れ木城小帰て胸を撫て報復の念を心肝に銘し諸事を改革し身を苦しめ思ひと焦して坐中膝を置て坐臥ふ之れを嘗め且人をして出入ふ汝會誓の恥を忘れたるのと呼をしめ其身田畑不至りて自ら耕作をあし夫人を室小在て機を織り買人小下り賓客小遇し貧と賑と死せるものを弔ひて庶民と其勞を同ふして越國の興復を謀るも苦慮し又范蠡小命トて國政を掌らしむ蠡曰く謀を惟幕の内小運らし勝を千里の外小決する事種臣小及も亦と金ども國家を鎮撫して百姓を親附する事も臣まゝ種小及も亦國政の如きも王之ねを種小命せよと於是句踐大夫種小命トて國政を掌とらしめ范蠡小命トて大夫拓

昔と共小吳小雙として趣の（范蠡）小居る事二年
 小して越小帰る吳王夫差の七年齊の景公薨りて大臣
 皆ふ罷を争ひ新小位小即くの君甚だ弱しと聞て兵を
 起して之れを討むと商議す伍子胥之れを諫て曰く臣
 聞く處小依れを越王勾踐往年敗衄の恨を吳小報せむ
 として寢食を安せず多く勇士を募ると云へり左きむ
 苟も勾踐の生てあらむ限りも到底吳國の憂患も免れ
 らざり今之れを病小譬れを齊も皮膚の疾よして越も
 腹心の疾あり大王腹心の大患を先小せお由もふさ齊
 を討むとす亦諤ふらずやと吳王聽お遂小北齊を討ち
 大ひふ艾陵小戦て之れを敗る夫より連年子胥の諫め
 を用ぬず魯を討ち齊を討て更小越の動静を顧みおた

是越王勾踐も充分其間を得て范蠡大夫種等の謀略を
 用ひ陽小吳小恭順して陰小兵を練り賤を蓄へ死士を
 養て吳小報せむ事を勤む既小吳の十一年小至りても
 子胥の屢王小勸めて越を圍ると聞さ只其君臣の心を
 怠らし先むと群臣と共小賤物珍寶を持して吳小朝し
 益す帰項の趣を表せり伯嚭等越の賄賂を受けて子胥の
 卓見を蔑視し厚く勾踐君臣を饗して其國小返す子胥
 此の有様を見て終始快々として樂まず獨り自ら越の吳小
 伏とおさむを憂ひ居たりしが此の年王より齊の國よ
 趣くづさの使者を命せられけれを子胥益す憂て思へ
 るよふ吳王今伯嚭等が佞言を信じて無益の戦争のみ
 を事とし腹心の患たる越小對し斯の如くおれを將末

俗子孫傳イロヨ 卷之三
勾踐の為小族滅せられむ事遠きふあらばと齊小行く
は臨で其子小謂て曰く吾數回王小諫むれども王更小
用ゐざれを吳國と到底越の所有となりぬべし汝此の
國小在て俱小亡びむ事誠小益ふ父と共小齊小至り
他日の青雲を希圖面と露小携て齊の國小趣き其
子を齊の大臣鮑牧と云へる小抱し使の用を終りて復
命せしは太宰執地時既小伍子胥と隙あり密小吳王小
謀して曰く子胥の人とあり剛戾よして恩小感せ亦曾
て楚小在るの時其父の殺さるゝた見捨て奔れり大
王決して油断しおふべからばと左ささた小吳王之れ
を疑ふの折柄ふれを伯嚭の言を聞て益す疑圖を抱き
之れより子胥を疏ること一と方かふらば是子胥朝小

出ど病びと稱して家小閉し籠りければ伯嚭又謀して曰
く大王前小齊を伐むとしふひし時子胥の謀疏を用ゐ
られ亦のち戦ひの勝利あるふ及で已の執を首す却て大
王を怨望せり且つ頃日頃聞く處を依れを前小齊國小
使せし時其子を伴ふは齊の鮑牧を寄せたりと云へり是子胥
が既小異志を抱けるの証智者を待たしてある大王早く圖りお
とされを他日大ひなる悔ひあらむと吳王之れを聞て愈り怒り汝
忠臣能くも心付きたり我れ亦既小彼の挙動を認めあ
りし乃ち使者を以て伍子胥小屬録と云へる劍を賜ひ
自ら首を刎て死せよと言しめられければ子胥兼て斯
くあらむと思ひ居たりしが天を仰ぎて曰く嗚呼
謀臣伯嚭吳國を亡せり王之れを覺らず及て我を謀

す柳吳國の今日ある誰れか功を皆あつて我ら
 功ふらざるを左れをこそ今王前子位不即くの日
 不嘗り此の國を分て我れ不與へむと云ひし我れ敢
 て之れを望ます然る今設臣の言を信して輕々
 長者を殺す至る豈概歎の極ありや又其家臣子告
 て曰く吾が墓側不擯と云へる木を植よ此の木の繁茂
 して日用材不立つべき時節も吳の國うあらば沿と
 あるべし又我が眼を抉て吳の東門の上不懸我れ越
 兵の吳を滅すを觀むと云し終て自ら首列て死す使者
 前後此の有様を見聞し歸て復命しければ吳王大ひ
 怒り其尸を取て之れを鳩夷革不包み城外の江中不投
 せしめらるる后吳人其薄命の死を憐れみて江の頭不祠

と立て晉山と名けて祭りしとや去る程不吳王も子晉
 を誅して心中忌憚る處不専ら攻伐を事として數々
 隣國と戰ふ中不越も服従の屬國と見做し毫も意
 不介せず兵を起してま不齊を討ち此の盛兵不衆して
 中國の諸侯不霸たらむと十四年春遂不道を轉して黃
 池不至り此の處不池して太宰伯執等と議し諸侯を會
 して盟を為さむと四方不傳達す此の年秋七月國々の
 諸侯兵を引て黃池不會し夫の陣所を定めて後ち吳王
 小面會し其盟不ひの日を定めて帰しければ吳王も速不
 諸侯の集るを喜び期日の至るを待居たる不兎角す
 内期日未りぬれを今日不中國の盟主たらむ早朝より
 軍伍を整理して盟壇不至り諸侯の列坐せざるを見廻し

て禮義を奉り兼て各位も知らる、如く我先祖も太伯
仲雍もして周室の尊長たり左れも今日の盟もたて
勿論吳國もその中國の盟もたるべしと謂て將も壇も登
りむとせし中遂るの方も當り吳王暫く待るべし
疾ふ中國の盟もして周室の尊長たるものありと揚
言するものあり吳王驚て之れを見れも十二列國の内
もたて疾ふ霸業を興して現も中國の盟もたる昔の定
公あり左右趙鞅司馬寅もと名高明臣を隨へまも將も
壇も登らむとするの勢もふり吳王此の体を見て心中
憤懣も耐す定公も向て曰く今日の天下も於苟もも周
室の宗たるを以て諸侯の内誰れも我も右も出るもの
ありむ定公遂て後國と謀るふられ定公曰く姫姓もた

て我れ伯たり豈吳の偏墮も在て中國と通するの
淺きもの盟もたると得むやと双方長を争ふて止ま
す既も立分れて干戈も及むとすも至れり時も吳
の本國より飛騎來り急も吳王も奏する事ありと告る
ものありしを吳王何事あらむ直も會場も召し入れ
其故を問も使者七人息も切て會場も入り禮義もそこ
くも具申す大王久しく外征を務めて國都を顧みざる
か故も越王句踐其虚も乘り先月下旬不意も襲撃も本
城を攻圍もみたるを以て在國の面々臣等も力を併せ百
方之れも防戦も試みたるも其兵も年操練もしたるの銳
鋒もて我兵も毎戦利も失ふも遂も王子友も越軍の虜
とありかへり速も師を班しむとされも國或も越の有

後漢書 卷之三 三十四

とあらむと云ひければ呉王心中甚だ驚きたるも今諸侯と盟をとり將不覇を困らむとするの機會あれば色も出さず事漏洩せし諸侯の憂あらむと思ひ故と使者を叱りて曰く勾踐呉臣として數年我れ不貢を贈りて使聘虚時あり何ぞ斯の如き挙動あらむや汝等浮説を以て我れを欺むやんとあす其罪許すべからばと直ふ有司不命して七人の使者を斬て其口を塞し諸侯の中裁ふ依て晋の定公を譲り會を終て班師の令を布き本國へ歸り太宰伯嚭等と議して一度越と和して其難を免る之れより以後越の兵勢次第強くして呉連年其の兵を蒙りて將卒防戦み而巴奔命せり後ち呉の二十一年乃ち周の元王の即位元年越王勾踐大夫

種范蠡等と大舉し水陸の兩軍並進て呉を圍む呉王大ひみ惶怖し諸將と議し兵を出して拒抗せしも凡そ呉の才器老成と云ふものも皆あ既に齊晋等の戦争不討死し今現み呉不在る處のものも大抵奸邪諂佞の小人もあられを脱弱疲老の用をあさるもの此みよて又國民比年賦歛の煩重よ困弊し軍資充分あらざるを以て一も墓々しく戦争する事能もた之れよ引換て越の軍も心志を勵し備み伏急を報ずることとのみ目的としたりものあれを精兵勁卒皆あ一騎當千の勇ありて何れも呉を屠るの外更は餘念あるものあり左れを呉の軍毎戦利なく國將崩陥の勢あるを以て短慮の呉王戦略を掌て惟幕の中不安坐する事能えず頃越の

水軍最も鋭勁我が軍屢之れ小挫敗せらるゝを見て馬
を飛して吳江の頭小至り船を磨て之れ小打乗り潰兵
を指揮して縦横奮撃敵の船艦を駈崩さんとするよ
越軍の水師早くも此の体を見て數艦一齊小浪を衝て
進みたりか未だ兵を交ひる及むず北走せしむ
吳王勢よく乗じて憤勇一倍し厲聲罵りて日句踐會誓の
太恩を忘却し敢て天命を逆らふ之れを助くる汝雜卒
等俱に誅伐の鋒を受よ何ぞ奔て不義の生を保むとす
るやと金鼓をふらして我が兵を勵まし船を馳て追掛
け地位六七里も進みしと思ふ頃水面忽ち敵船小墜り
進退殆ど道なきに至れり吳王於是大い驚きすわ越
軍の術計小陥れり士卒一方を切り開きて船を退けよ

と号令未だ終らざる小越軍の船中より一人の大將顯
れ出て我れも越の大總督范蠡あり夏君句踐前小會誓
小於て大王の鴻恩を蒙り一日も之れを忘却せず年
兵馬を練り志力を勵まし唯備ふ其恩小報むと欲し小
臣をして今茲小大王を迎む大王のあらば生て吳小
降の事を思ふふられと云ひ終ると等しく箭を放つこ
と雨の如し吳王范蠡の侮言を聞き怒髪天を衝くの思
ひをふせども越軍の箭先小射すくめられて面を振る
ことも叶はず諸兵と共小鏖の袖をらざして箭種の尽
るを待つ范蠡之れを見て更小一手の死士を指揮し別
小舟小乗じて箭の下を潜吳の兵船の帆索を截しむ
れ小毎船波小後て漂流し其掛引自由あらざるを以て

今も手を束て討るの外なく死すもの數を知らず
渺茫ある吳江忽ち屍の島を浮べ碧水裏して紅の波を
揚ぐ吳王勇猛ありと金ども東早道るふ道なく嗚呼
吳の運益ふ尽たりと慨嘆一声身を躍して已も水中に
飛入らむとせし吳將一人小舟を以て迎へ来手早く
乱軍の中を潜り脱陸地を指して疾走し幾兵二三十人
を纏りて姑蘇山よ逃れ入りけれと越の兩軍早之れを
謀知し續て姑蘇山を取圍みたり吳王此の時心驚胆戰
手足の措處を覺へず偏み伯都み向て智計を求むれと
方寸何の策畧あるべさ後らよ直辞を構て云へるよ
ふ一勝一敗も兵家の常あり大王尊處を勞する勿れ
前の日越の會誓の事み做ひ辞を卑して燃眉の急を免

れ後緩々再舉を圖るべしと吳王之れも同し姑蘇山よ
隨へるもの内より公孫雄と云へる重臣を撰み肉祖
膝行して越の本營に至りし以て降参を云ひ入れけ
る公孫雄命を受けて越の陣み至り斯くと報りけれも
越王勾踐召し入れて之れを見るふ雄頓首再拜して曰
く孤臣夫差敢て腹心を布く異日嘗て罪を會誓み蒙
夫差敢て命み送わす君王と成いて尋るを得あり今君
王玉趾を奉て孤臣を誅しよふ孤臣惟命是隨ふのみ然
れども君王の至仁帰するものを誅しよも亦前み會誓
の如く設し臣等君臣死を免るを得も誠み鴻恩の至り
ありと越王之れを聞て心私のみ哀を催し將み許さむ
とす范蠡傍み在りて曰く前み會誓の事夫越國を以て

吳王不賜也然也吳王遂不之取也今夫吳國
を以て越不賜也越天不逆之取也越を越
他日今日の吳と同一のらむのみ我の越國の今日ある
もの決して偶然ふあらす將士皆不非常の辛苦を忍び
殆ど二十年よして其仇を復す事を得たり大王今よ
て之れを許さむと一むを既ふ會誓の恥を忘れむるの
と越王曰く吾れ敢て之れを忘れず然れども使者を見
て忍びざるあり范蠡曰く王のふらば此の處置を自ら
一むふ事ふられ越王曰く汝能く之れを計れと范蠡於
是軍士を招き令を出して兵を進め公孫雄不向て曰く
我の王既ふ事を執事よ任トむへり使者速のふ帰るべ
公孫雄泣いて曰く臣等依令三族を誅せらるるとも敢て

之れを許さむと大王願くも寡君の罪のみを許さむと
范蠡使者を叱りて曰く使者何を我の命ふ抗するや去
らむを罪益す重なるべしと公孫雄語塞り術極まり
涙を揮ひ遙のよ越王を見上げ悄然として姑蘇山不帰
り其趣を吳王よ告げければ吳王首を垂れて敢て言を
不君臣問々として計の施さず危さふく皆不片息を吐
て居たる處よ越王も前ふ使者の帰る不臨み左も打ち
凋れたる容色を見て心の内竊不慍隱を催し范蠡大夫
種等よ告げ不別不使を派して云ふ一めらるるよ吳
王越不對するの罪正不其誅を免るべらざれども今
前兆を悔ひて哀を請ふことよと憐れむ不堪へたれを
吳の諸臣も皆不職を解て庶人よ下し吳王獨り越の甬

東ふ於て百家の地をよへて之れは君たるべしとふれ
 を吳王荅へふ躊躇せる折柄范蠡早や兵を引て姑蘇の
 臺を圍みければ吳王免るべうらざるを悟り使者ふ向
 て禮を奉り吾れ己よ老てまふ君王ふ使ふ事能もた
 宜しく其旨を謝せよと陳べ更ふ伯嚭ふ向て云へるよ
 吾れ前ふ子胥の諫を用ひずして是ふ至る今死して
 黄泉に至るもまふ何の面目より子胥を見んと其面を掩
 ひ送ふ自ら首刎て死す范蠡は於て軍を進め吳王の
 屍を収めまふ越王を迎へ次の日ふ至り吳王の屍を築
 りて伯嚭を誅し吳の賤室珠玉を纏めて諸事を處理し
 一人の大將を置て其土を守りしめ君臣遂ふ越を指し
 て凱旋しける吳大伯より夫差ふ至るまで世數凡て二

十五世茲に至て全く亡ふ時小周の元王の即位三年十
 一月にして我の朝人王五代孝昭天皇の御即位三年ふ

越の略史

越王勾踐も其先禹の苗裔にして夏后帝少康の庶子ふ
 り會誓ふ封せられ以て禹の祀りを奉守す夫より後二
 十餘世もて允常ふ至る允常の時數々吳王闔廔と相攻
 伐せしむ允常卒して子勾踐立ち始めて越王と稱し稍
 や強大の勢あり越王の元年吳王闔廔允常死すと聞
 て乃ち師を興して越を伐つ越王勾踐此の時死しを
 放て挑戦し吳王を傷け遂ふ死し至りしむ之れより後
 終始互ひし相敵視し越王の二十四年遂ふ吳を亡滅し

兵を止めて國を歸らば北の方淮を渡り齊晋の諸侯と
徐洲の地を會し貢を周に至す周の元王敕使を以て越
王に爵を賜ふて伯とす夫よりまづ淮南を渡り遂に
越王は歸る北の時ふ當り越王の勢は隣國を振ひ諸侯
悉く來り賀す句踐於是越の霸王と稱す句踐卒して後
九そ七代を経て王無疆の時ふ至り周の顯王の三十五
年楚の威王の爲に亡滅せられ諸族悉く散り後裔も
漢の時ふ顯る

范蠡の略傳

范蠡越王句踐の事一既にして身を苦め心力を戮せて深く
謀ること二十餘年竟ふ呉を滅して會稽の恥を報じ北
の方兵を淮を渡り以て齊晋に歸り中興の功を報じて周

室を尊び區々たる越の國を以て遂に霸業を開けり
む范蠡越王に隨て呉を亡滅し還て上將軍となり或時
慨然として以て爲く英雄の末路果して悲むべきもの
あり大名の下に以て久しく居るべからばと書を作て越
王に辭して曰く臣聞く君憂れを臣勞し主辱しめらる
れを臣死すと云へり昔時君呉の爲に恥ぢ會稽に蒙る
臣此の時を以て死ぶざる所以のものも乃ち今日を致
さむ欲するが故あり今や既にして恥を雪ぎ國を平ん
誠ふ死すべきの秋あり君請ふ願くを臣に許すよ今よ
り後の餘命を以てせよと句踐此の書を見て曰く我れ
子の功は依て今日の隆盛を致すを得たり今より後
正ふ子と國を分て之れを保むとす子若し敢て命を
正ふ子と國を分て之れを保むとす子若し敢て命を

ともぎに正小誅を加ふべきのみと范蠡曰く君も君か
 令を行ひよふに臣も臣の意を行むのみと乃ち家
 帰り窃のふ其妻子よ告げ輕室珠玉を装着し家門の
 後屬を總べ舟に乗じて五湖に棹さし越の都も今と限
 りと木小映する月影と共み海に浮で脱れ去りける越
 王於是追慕の念を起し後ち會稽山に表して范蠡の奉
 邑とあせり去る程に范蠡も越を出てより海に浮むで
 齊國の海濱に至り姓名を變じて自ら鴟夷子皮と名乗
 り身を苦しめて海畔に耕し父子心を戮せて産を治む
 此に任む事幾何もよく其富數千萬小至れり齊國の君
 其賢を聞き范蠡を召して國の宰相とあす一日蠡唱然
 とて嘆して曰く家よ居ても千金を致し官も居ても

卿相を致す此れ誠ふ布衣の極あり久しき尊名を受
 と不祥ありと乃ち相の印を歸して其職を辞し是迄齊
 の國に於て積蓄したる財宝を散りて之れを其知友
 郷党等小共へ重なる寶のみを懐て齊を去り陶の地よ
 至る范蠡陶に至りて思ふよ今より天下廣き地方を
 相し物産の有無を交易し大利を圖らんとは是まは姓
 名を變じて陶朱公と稱し父子刻苦して産を治めよ
 數年を以て富鉅萬に至り其名冷く天下に聞へ後
 遂に此の地よ老す范蠡嘗て越を去り齊に至りし時大
 夫種小書を贈て曰く蜚鳥尽て良弓藏れ狡兔死して走
 物烹る我れ聞く越王の人と為り長頭鳥喙共小患難を
 共よすべくも與小安樂を共よすべからば子何ぞ早く

雅史 卷之三 四十一 山名

去らざるは種此の書を見てまゝ悟る處あり病と稱して朝ふ出ざるを以て或人越王小讓して曰く種此の頃に至りても形神快々として樂まず異志何ふ似たり君早く其處置をおくむとされむ彼れ將ふ不測を作さんつと越王素より疑忌あるが為小即時種小劍を賜ふて曰く子曾て我れは兵を破るの策七術を教ゆ我れ其三策を用ひて兵を破りたれを其四策を現し子の手小存せり子我が為小地下の先王は隨て之れを試よと種之れを聞て范蠡の先見は及むざるを嘆き遂ひよ自ら屠て死す

著者曰く蠡云へる如く英雄の末路実よ悲むべきとのあり然り而して獨り范蠡王佐の才定亂の武あり

て英氣慷慨始終其所と得三遷の出發皆み珠功あり以て全美の采名を後古小垂る誠よ絶世の英雄と云ふべきあり

蔡

蔡は姓はもと其先周の文王の五男叔度の封せらるる處あり文王の御子武王立てて十三年殷の紂王を討滅して天下を一統し釋衆諸功臣と封せらるる時小當り叔度始めて蔡小封せり後諸侯とあり御兄叔鮮と共に殷の後武庚を監護して周朝ふ臣事せられし武王崩して後成王未だ幼冲に在せしが故に周公且政事を攝り天下の政權を掌握せられし叔鮮等之れを猜忌羨望するの意より叛心を起し周公は異志あるか

如く悪くさまよふ云ひ流布し成王を以て疑國を抱り
め巴ふ周公の大事とあらんとす叔度此の事と興りて
首謀と見後遂に發覺し此の徒の誅戮せらるる時ふ當
り叔度官位を剥奪し中國の外ある郭鄰と云へる地ふ
放逐せられ蔡國一度び断滅せしむ叔度の御子胡と云
へるものあり幼稚より氣節ありて能く其父の惡行と
改め仁義を旨とし徳行ふ篤かりしを何日の此の
事の周公は聞へ召し出されて魯國の卿士とあり實行
益ず顯もれしを以て周公深く情誼を思され成王の御
即位八年遂に蔡を以て故の蔡に封じむへり之れを蔡國
恢復の蔡仲とあす蔡仲卒して後ち五代を経て釐侯よ
至るまで凡そ六代の間無事周朝は仕へて別は記す程

の事とあつし釐侯立て三十九年周の幽王犬戎の
為に亡されしを以て平王東遷の衰運を兆し諸侯群起し
て皆々獨立の姿を現し所謂春秋の古とありしを
釐侯もまた十二列國の一として諸侯と分争するに至
る釐侯より後ち四代を経て哀侯の代となり哀侯夫人
を陳國よと娶り同列息國の君も亦陳と娶れり息の
夫人陳國へ帯平の前姉妹の親情を以て蔡國を過り蔡
夫人を尋問す然るふ蔡公息夫人の淡妝素抹用月羞花
の容を見て神搖さ魂奪し杜恍然想ひを凝り強て挽
割せられ饗應備さる酒興も托し通りて之れを挑
む息侯後此の事を聞て其無れを怒り蔡を亡びんと
して一計を擬し密に楚王を告て曰く君兵を起し我

楚王を告て曰く君兵を起し我

國を伐て我救ひと蔡を求めむ蔡必ず兵を出さん君我
兵と夾さんて之れを伐む大に功ありんと楚王其言よ
後かひて兵を出す后之の息夫人よ福いと來さし息
國亡滅よ至るの件も楚國の都ふ分解す於是て哀侯楚
の文王と戦ひ軍敗れて之れは虐をれまざる遠く帰らず
楚は在る事九年より卒す國人哀侯の子勝と云へる
と立ちて繆侯とあす繆侯前よ其の女弟を齊の桓公よ嫁
せしむ之れを蔡夫人と云ふ桓公の寵ありて或曰御苑
の池よ齊公と俱よ小船を浮遊覽ありて時夫人戲
れよ手自操を操はれ共慣れざる技中船殆んど傾か
んとし危ふか里よ齊公驚いて顔色を變らね之れを
留むれ共夫人酒與よ衆して猶棹を操て止す松益く動

擣せるを以て齊公大に怒り其場を引せられ直に下知
有りて夫人を一時生國へ御預けとある蔡公之れを聞
亦怒て曰く齊公伯者の威を振ひ瑣末の過ちを簾よ
當方へ差戻すハ列國を輕蔑せし而已ふらず定めて離
別の意あらん好彼よ王離婚されんよ王と齊よ告す
てまよ他よ嫁さしめられしを桓公怒て五國の諸侯
を引率して蔡國へ討め寄たり繆公衆寡相敵すること
能はず遂に齊軍の爲に其身虜とあり國將よ亡滅じむ
とせしを諸侯爲よ恤れみて桓公よ謝罪し漸く蔡國を
保つ事よふせり之れより後蒞侯文侯の二代を経て景
侯よ至り景侯太子般の爲に楚の國より婦を娶りしよ
此の婦姿色ありて淫を好めその性ありしを景侯不

雅
羅
七
一
尺
三

コト
五
二
シ
ら
五

義も太子般の眼を忍びて何日か禽獸の所行あり太子
 此の事を窺ひ知りて憤懣し耐た遂ひ景侯を弑し
 て自立せり之を靈侯とふす靈侯立て未だ二年ありた
 楚の國の公子圍と云へるもの其君を弑して自立し靈
 王と稱す此の時春秋の末世とあり晋楚の二國尤も
 強大にして列國の諸侯平分して晋は屬せざれを楚は
 屬す楚の靈王已れの狀を顧みず却つて蔡の靈侯其父
 を弑するの罪ありとて之れを申と云へる地は誘ひ出
 し酒を酔ひめて襲ひ殺し蔡の國を楚王の末弟去疾
 と云へるに與へられたり於是蔡國断滅し屬せし三
 年を経て去疾靈王の無道を惡み之れを殺して楚の國
 を奪ひ自ら立つて平王となるふ及び恩義を以て其味

方を増し已れを守らむと欲し前太子般を弑されし
 景侯の少子廬と云へるもの他は潜りてを捜索し出
 し改めて之れを蔡の君平侯とふす平侯立て九年し
 て卒し末だ嗣を定ざる靈侯の孫東國平侯の孫子を
 攻めて自立す之れを悼侯とふす悼侯三年しして卒し
 弟申立つ之れを昭侯とふす昭侯立て十年楚國は朝し
 佩玉と狐裘とを献す昭王之れを着して昭侯を饗す楚
 の重臣子常其美を羨やみ昭侯佩る所の玉と狐裘とを
 請昭侯惜んでよへず之れは因て子常を誅せられ國は
 帰る事能はず三年の間柳留せられし昭侯此臣の諫
 めを聞いて遂に子常を献し國は帰るを得蔡侯之れを遣
 懐しして晋の國と通して楚を攻めたりしが其望を達

す。事能かず却て楚國の兵を蒙るに至りしを昭侯
 晏岡為す處を知らず時其王國虚數々楚と戦ひま
 不日進發せむとするの摸擬ありしを昭侯之れを奇
 貸と直其に至りて其軍より遂に大し楚を
 破れり後二十八年事を以て其大夫の為に殺せられ
 御子成候代り立つ之れより後聲候元候を経て侯齊の
 時に至り楚の惠王の為に断滅せられ蔡の祀り全く絶
 時周の貞定王即位二十二年よりして戦朝人王五代
 孝昭天皇の御即位二十九年あり

著者曰く祭世を経る事叔度より候齊に至るまで凡
 て廿五世其間未だ曾て列國に志を得る事能はず終
 始常に諸候の輕侮を蒙り遂に難の中より亡るに至
 る其志を天下に得ざる事を

曹の初祖叔振鐸を姫姓にして周の文王の第六男あり
 武王天下を一統し始めて此の國に封せられ定陶と云
 一處に都して世々曹伯と稱す叔振鐸卒して後七
 代を経て惠伯の世に至り周の幽王犬戎の為に亡滅
 され平王東遷り時勢一變して天下所謂春秋の世と
 ふる及で諸候と等しく周朝の羈絆を脱し興よ世の
 動乱に興り素より小國にして著し功績を顕す
 こに能はず後ち繆公より十一代を経て悼公午の時よ
 至り曹の勢ひ益す弱く遂に一家の國に從屬せし如

く其勢カよ歴せられて之れ一朝たり一を悼公囚
 もれて國一帰る事能はず是群臣相議して其弟野を
 立て之れを声公とす声公立て五年悼公の叔父ある
 通と云へるもの声公を殺して代り立ゆ之れを隱公と
 ふす隠公位一即て僅う四年声公の弟露ま之れを
 弑して立ち自ら國政を總て靖公と稱せり靖公卒して
 御子伯陽立ち田獵を好み獵師一公孫彊と云へるもの
 御馬前一於て毎一獲もの有りて衆一越あるを賞し奉
 用ひて寵あり後終一政事を委ぬ固より幸佞の小人日
 して胆略あきを知らず之れと議して天下一亂たりむ
 事を謀り弱兵を卒て宋の國を侵せしを宋の景公怒
 て曹を攻めたりし伯陽之れを防とて能はず遂に

公孫彊と共一虜れて族滅せり曹叔振澤より伯陽一
 至るまで世數九そ二十五世茲一至て全く亡ぶ
 著者曰蔡曹の二國を周と同姓の諸侯一して春秋十
 二列國の旧國ありと金ども其勢カ終始微弱一して
 事跡の記すべきもの甚だ稀れあり故一唯世數を略
 挙ふて別一臆測の事實を附會せず読者幸一租漏を
 咎むる事ありれ

雅支那歴史代小史卷之三終

明治十六年三月二十日版權免許
同 年八月 出版 定價金三十拾錢

著述兼出版人

岡山縣平民

山名 太喜彌



甲府春日町
一番地寄留

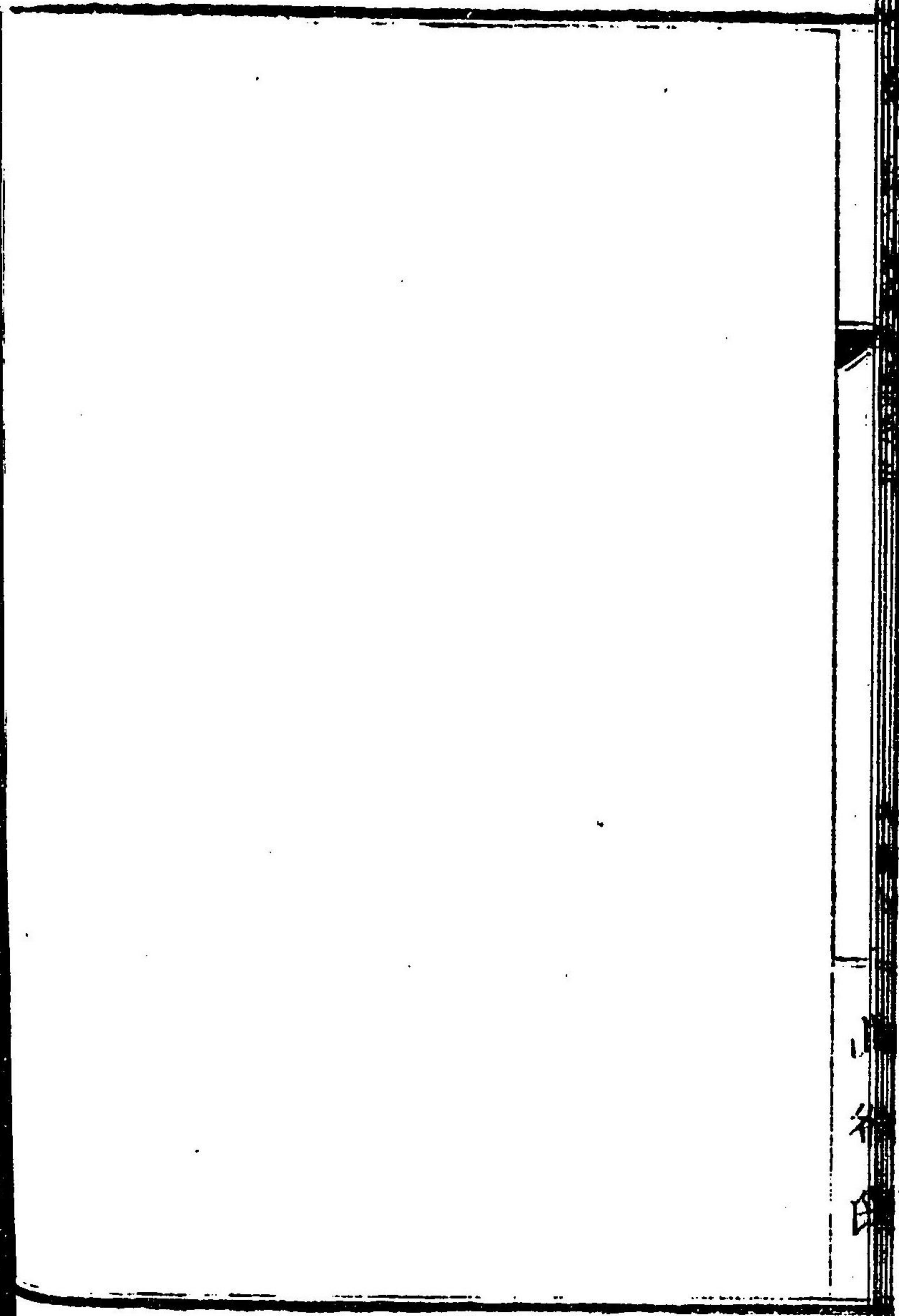
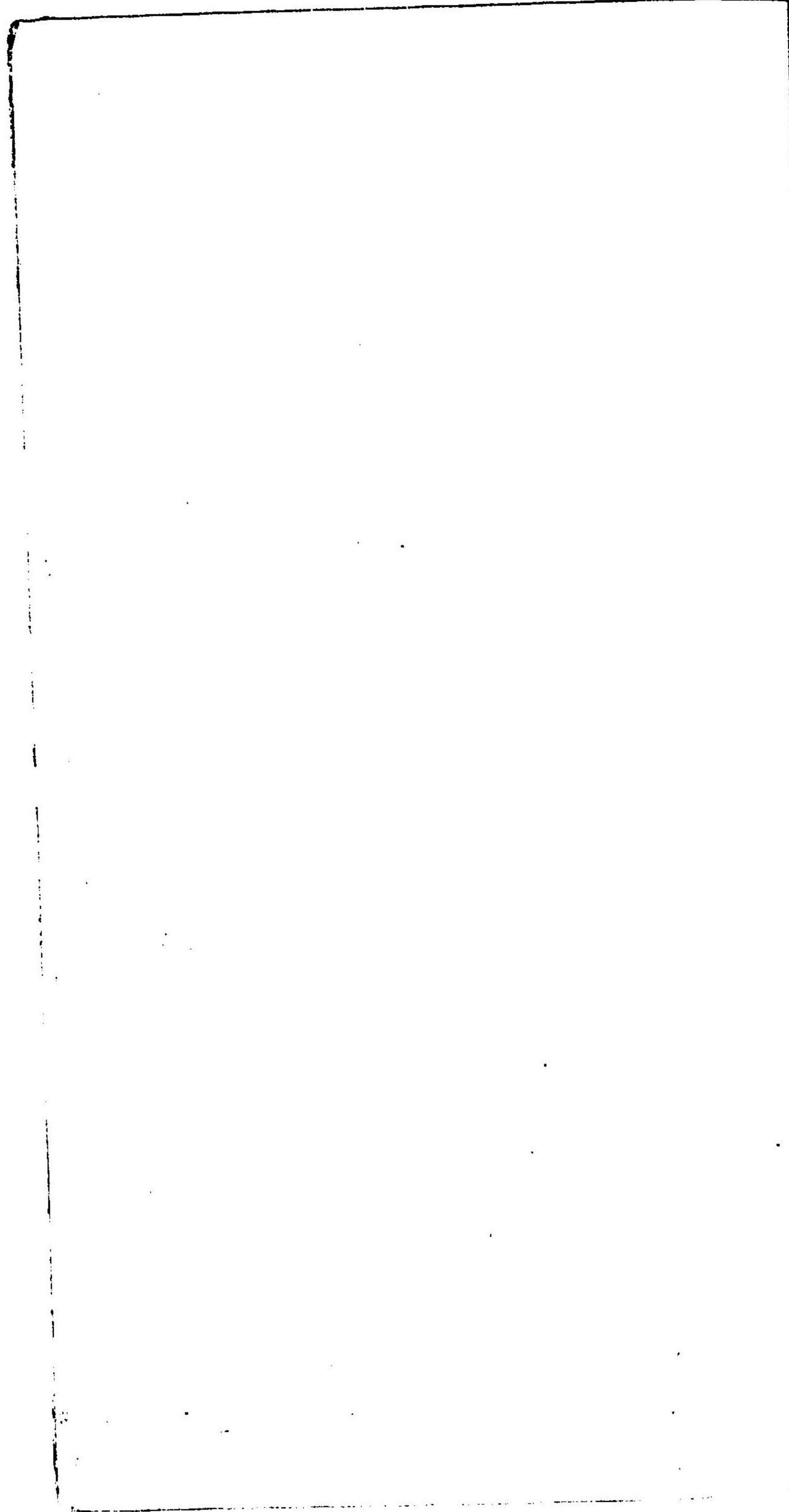
山梨縣平民

石原 平兵衛



甲府三日町
四番地

發賣元



山
林
野

